

昔の暮らしが示す新たな可能性

旧下田家住宅



注目の理由 その一 19年ぶりの屋根の葺替え

旧下田家住宅の屋根は自然の素材「カヤ」を三段に重ねた厚みのある構造です。今回はその一番上の段を19年ぶりに葺き替え、さらに屋根裏の竹すのこを交換しました。作業は8月下旬から12月中旬まで。一般の見学者も、郷土博物館の中庭から葺替えの様子を見ることができました。

◆多摩地域の特徴が見られる屋根

屋根を葺き替えた職人さんによると、旧下田家住宅には多摩地域特有の方法が見られるそうです。その1つが杉皮の活用。雨が流れてくる軒先に何枚も重ねて挟んだり、屋根の棟に使ったりしています。林業が盛んだった多摩地域では杉皮は副産物として入手しやすいと見られます。

く、カヤと併用することで屋根が腐りにくくなり、軒先の美しいラインを保持できます。

屋根の切妻部分も、多摩地域の特徴的な形。イチヨウの葉を模した屋根の飾りです。日本全国で、その地域特有のさまざまな形の切妻が見られます。

材料のカヤは、チガヤ、スゲ、ススキなどで、耐久性が高く昔の日本では重要な屋根材でした。「屋根に使うカヤは、刈ってから1年ほどおいて使うんだよ」とベテランの職人さんが作業の合間に教えてくれました。今回の旧下田家の葺替えにはおよそ1000束、重さにして約1トンのカヤが使われました。

屋根葺替えの工程



①足場を組む
旧下田家をぐるりと足場で囲みます。

②杉皮の取付け
古いカヤをはがし、軒先に杉皮を取り付けます。

③カヤの搬入
トラックで屋根材のカヤなどが到着。

④葺替え
新しいカヤを取り付けます。針に似た専用の道具を使い、カヤ束を縫いとめていくような作業です。

カヤを丁寧に刈って屋根の形を整えていきます。形の美しさももちろん大切。職人技の見せ所です。

⑤屋根裏の竹すのこの交換
屋根裏の竹すのこも新しいものに。屋根裏は囲炉裏の熱で暖かく、ここで蚕を育てていたこともありました。

⑥棟に丸竹を固定して完成
下から見たときに端が反りあがったように見えると格好が良いのだそうです。

注目の理由 その二

江戸時代末期のたたずまいが残る間取り

弘化4年（1847年・江戸時代・幕末）、小作坂下（羽西1丁目）に建てられた旧下田家住宅は、建築当時の形態がよく保存された状態で、昭和中期まで実際に人が暮らしていました。その後、昭和54年に当時の羽村町に寄贈され、昭和57年に現在の場所に移築・復元されました。

◆旧下田家住宅の貴重さ

戦後、高度経済成長を経て人々の生活スタイルが大きく変わったため、住宅もどんどん改築されていきました。そのような中で江戸時代の一般農家のたたずまいを残している旧下田家住宅は、歴史的にも非常に貴重なものです。

◆国の重要有形民俗文化財

移築時に、増築された広縁部分（機屋と呼ばれていた）を残すか議論になりましたが、養蚕に関する道具などが多く残されていたことや、機織り機を置いて実際に使用していたことから、この部分も含めて民俗文化財として残すことになりました。この民家で使用されていた生活用具1210点と建物は「羽村の民家（旧下田家）」とその生活用具」として国の重要有形民俗文化財の指定を受けました。



▲機屋には今も機織り機が置かれています。



▲カヤの間に杉皮を挟んだ軒。形にもこだわった仕上がりです。



▲屋根の両端にある切妻頂部。イチヨウの葉形です。